

## 【とくぞう】

ぼくの村では、むかしから、夜這い（よばい）が風習となっていました。

それでも、ひとり住いの戦争未亡人や寡婦（かふ）にかぎるといって、暗黙（あんもく）の了解はあったのですが。

【とくぞう】、本名津山徳三が、おぼけになる前は、「よばいのとくぞう」といわれて、村ではちょいとした英雄扱いでした。

なぜなら、夜這いといっても、村の女のほう拒んだら、指をくわえて引き上げねばならない。

けれども、【とくぞう】を拒む村の女は、ただのひとりもいなかったからです。

それは、なによりも【とくぞう】の容姿のためであって、なにしろ村一番の二枚目で、背も高く姿勢もよく、おしゃれでもありました。

【とくぞう】は中学までしか行きませんでした。小中学校の成績は優秀、運動は万能、品行方正でもありましたので、級長と生徒会長をやっていました。

【とくぞう】は、三人兄弟の末っ子ですが、上のふたりは町に行ってしまうと、父母も早く他界したもので、祖母に溺愛（できあい）されていました。

祖母は、町で働く【とくぞう】の兄たちの、仕送りで暮らしていましたが、その少なくはない仕送りのほとんどを、【とくぞう】のために費やしていました。

それで二十歳になっても、【とくぞう】は働かず、夜這いに精をだしていましたが、ある日とつぜん血を喀いて、「肺結核」という診断がくだされてしまいました。

そのころの村では、だれが毛嫌いされるかという、結核患者がいちばんでした。

町では、結核の特効薬がでまわっている、という噂があったものの、村では、もしまわってきても、高く買えるのは村長だけだといわれていました。

とうぜんのことながら、いままで快く迎え入れてくれていた、村の女たちが、みんな、【とくぞう】を拒むようになりました。

拒むのみならず、それこそ唾を吐きかけるほどの、冷たい仕打ちで接したのです。

そのため、やはりとうぜんのことながら、【とくぞう】は、夜這いがいっさいできなくなったのです。

夜這いができなくなった【とくぞう】は、おおいに暇になったけれども、結核ではいまさら働くわけにもいかず、終日家でごろごろ、三年寝太郎状態が三年続きました。

その間、【とくぞう】の病状は、しだいに悪くなり、祖母も【とくぞう】の病気がうつって死んでしまうと、村では、【とくぞう】に対して「村八分」を実行したのです。

それで怒り狂ったというわけでもなく、毎日呆然としていましたが、医者にいわせると、結核菌が脳にまわっているとのことでした。

二枚目だった顔は、三枚目以下に崩れ、やせこけて、いつもぼろぼろのものを身に付けていました。

それからの【とくぞう】は、「よばいのとくぞう」ではなく、「おばけのとくぞう」とよばれるようになりました。

住むところはあっても、何を食べているかもわからず、ひとりのこどもが、【とくぞう】が鼠を食っているところを目撃（もくげき）したこともあって、「おばけのとくぞう」は、「ねずみおとこのとくぞう」とも「かいびょうのとくぞう」とも、よばれるようになりました。

この【とくぞう】が、いつこんな計画をたて、いつこんな準備をりはじめたのか、だれにもわかりませんでした。

その年の秋、【とくぞう】は満二十五歳になり、その三日後の月も雲に隠れた夜半でした。

【とくぞう】が武装し、村の家の一軒一軒に押し入り、家人を襲い始めたのです。

そのかっこうは、ぼろの上に鉢巻（はちまき）、襷（たすき）、腰紐（こしひも）。

懐中電灯を首からぶらさげ、日本刀と七首（あいくち）と鎌を腰に差し、改造猟銃（九連発）と改造拳銃（十三連発）を携え、薬莢や弾丸をたっぷり入れた袋をさげていました。

【とくぞう】がまず襲ったのは、夜這いをしていた家の、戦争未亡人や寡婦たちでした。

そのころの村では、財産のある数軒をのぞいては、戸締まりという習慣がありませんでしたので、押し入るのは容易でした。

山田すえは、熟睡しているところを鎌で首を切られ、首は胴からはなれました。

夜這いの吉岡一平は、そろそろ引き上げようと、台所で握り飯を食っていたところを、鎌を腕と足に受けて、七転八倒、最後は下腹部をえぐられ、こぼれおちたはらわたと鎌を、かき抱いたまま一時間後に死亡しました。

田中まさは、やはり寝ているところを、猟銃で胸を撃ちぬかれ、胸に拳がはいるほどの穴で、即死でした。

夜這いの畠山助夫は、仮眠をとって、やはり猟銃で腰を撃たれ七転八倒、最後は下腹部に拳銃の弾をくらって、はげしくくるしみ、糞尿を垂れ流しつつ、二時間後に死亡しました。

加藤はるは、起きていて、とっさに庖丁をつかんで抵抗しましたが、日本刀で袈

姿（けさ）がけに斬られ、即死しました。

夜這いの石川光男は、はる以上に抵抗し、【とくぞう】の日本刀を必死で奪い取って振り回しましたが、拳銃の弾を頭にくらって、脳漿（のうしょう）を垂らしながら、一時間後に死亡しました。

坂本てつは、【とくぞう】の姿を見ると、土間にかけておりて、土下座して命乞いをしましたが、【とくぞう】はその後頭部に拳銃の弾を三発撃ちこみ、てつの頭は熟れたざくろ状態になりました。

夜這いの片山新造も、土間で土下座をしましたが、一瞬の隙をみて家から飛び出しました。

しかしその背中に猟銃の弾を撃ちこまれ、胸から心臓が飛び出して、即死しました。

このころになると、銃の音に気づいた村の青年たちが、鍬（くわ）や鉈（なた）を手に集まってきました。

中上信次、古井新吉、西村貫太、石原慎太、小川邦平、五木寛、大江健三です。

その集まりの中に、【とくぞう】は、猟銃と拳銃を続けざまに撃ち続け、薬莖も弾丸もすっかり無くなった十分後には、全員がただの肉塊となって死亡していました。

血だまりが、翌朝ちいさな池をつくっていたそうです。

村の老人たちは、駐在所に駆け込み、駐在所では至急町に応援を頼みました。

その間【とくぞう】は、右手に日本刀、左手に七首をつかんで、様子見で外に出た村びとたちを次々に襲い、島田辰雄とその嫁とその娘、加納大吉とその両親、山本伝助とその三人のこどもたちの十人を、ためらいもなくあやめ、二十人に重軽傷を負わせました。

そうして【とくぞう】は、大山に逃げ込みました。

町から車で応援隊がやってきて、警察官が十名揃ったものですから、村の自警団（じけいだん）十名と共に、四班に分かれて、山狩りを開始しました。

日本刀も七首もすでに刃こぼれして、どうせ使い物にならないだろうと、不安も無く漆黒の山道を松明（たいまつ）片手に、みんなぐんぐん登っていったのだが、【とくぞう】はあらかじめ大山のふもとに、多量の武器と少量の食物を隠しておいたのです。

別の猟銃三丁、別の日本刀三本、手榴弾三個などで、【とくぞう】はそれらをかっついて、鬱蒼（うっそう）とした山奥深く入って行ったのです。

ですから、山狩り隊は次々と襲われ、まだ日が登らぬうちに、死者五名、重軽傷十名となってしまいました。

なにせ神出鬼没、樹木の密集した陰から、または上から、とても結核患者とはお

もわれぬ俊敏なうごきで、声もなくいきなり襲いかかってくるものですから、たまったものではない。

すでに総計、死者三十、負傷者三十。

山狩り隊の隊長は、地団駄をふんで、別途「暗殺隊」を組織すべきであると提案しました。

相手は人間じゃない、おばけなんだから、そうでもしないとやっつけられない。

その案は、大山のふもとで待機している村長のもとにもたらされ、村長は「暗殺隊」は要らない、「暗殺者」ひとりでもいい、とつぶやいたのです。

村長は、自転車で自ら祠まで出向き、寝ている懐爺を起して、丁重に頭を下げました。

はじめ難色（なんしょく）をしめしていた懐爺も、こどもを含めた死者の数を聞いて、おもむろにうなづいたのです。

懐爺は夜明けとともに動き始めました。

水筒を腰に、一本の杖だけを手にして、大山を登り始めました。

ぼくはそこまでしかみていませんから、そのあとは単なる推測にすぎません。

懐爺は二時間ほどかけて、【とくぞう】を見つけました。

そうしてすぐに、何やら【とくぞう】に暗示をかけました。

【とくぞう】は懐爺の前で、ゆくりなく自殺し、それでもさすがに「おばけのとくぞう」ですから、なんと墓場で生き返りました。

それからの【とくぞう】は、「はかばのとくぞう」とよばれました。

せっかく生き返ったのに、【とくぞう】は留置場でまた自殺を図りました。

自分の手で、自分の首を締めたのです。

こんども甦生（そせい）しそうでしたので、担当が【とくぞう】の首を締めました。

しかし【とくぞう】は息を吹き返し、病院に入りました。

一ヶ月の入院で、【とくぞう】は元気がでて、結核もなおったのかもしれないと、村びとたちにおもわせました。

ところがせっかく回復したのに、こんどは病院で自殺を図りました。

病院の窓から飛び下りたのですが、二階でしたので、命に別状（べつじょう）はなかったのですが、頸椎損傷（けいついそんしょう）で、からだが不自由になりました。

それと、両方の目玉が飛び出したので、目も不自由になりました。

それでも、そういうことを、つごう三十回やって、とうとう三十回めに、「はかばのとくぞう」は、完全に墓に入りました。

ぼくは【とくぞう】の自殺の回数と、【とくぞう】が殺した人間の数が同一なのに、注目しました。

これは偶然ではない。

懐爺のしわざにちがいないと、いまでも確信しています。

三十人殺した者は、死刑になるにしろ自殺するにしろ、一回だけでは不十分、足りない。

懐爺は、おばけの親分として、「おばけのとくぞう」に、そういう重い罰を与えたにちがいません。